平成１５年３月１日発行

かまにし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第7号

わがまちの顔

町の歌手・豆腐屋　藤浪　源八郎さん

西蒲田七丁目で豆腐屋を営む「とうふや源さん」こと藤浪源八郎さんは、家業のかたわら歌手活動も行っています。

昭和十二年、(旧)御園一丁目で生まれた藤浪さんは、相生小学校に入学。しかし、折しも戦争が激しくなり、埼玉県に一年ほど疎開。戦後、矢口東小学校に編入し、卒業されました。その後は四人兄弟の長男として現在の西蒲田七丁目14番で家業を継ぎ、以後四十年余り。近隣から愛され続けている町の名物豆腐屋さんです。

歌を始めたきっかけは、山登りにあるそうです。高校の「雪嶺会」という登山同好会で幾つもの山に登っていた頃のこと。楽器がないのでロシア民謡やダークダックスの「キャンプの歌」などを歌いながら登ったといいます。ご本人は、「山男と歌は、かなり密接な関係があるのでは・・・」と語ります。

現在、「うたびと会(八王子)」や「歌謡ワンダースの会(新小岩)」など、いくつかの歌の同好会に参加されており、歌の発表会や施設の慰問のボランティアなどに忙しい日々を過ごされています。

また、平成十年には日本クラウンレコードから「とうふや源さん」、「蒲田人情歌」が収録されたCDを発表。近隣では有名人となり、NHKの「素人のど自慢」や、日本テレビの「各駅停車の旅」、東急ケーブルテレビにも出演されました。

こんな源さんのお店には、いつも歌のBGMが流れています。ご自身の歌のCDは照れるので流さないそうです。

近々、「源さんと女房」、「みちのく鳴瀬川」という曲(作詞　峰八郎、作曲　平川　竜城)を出されますが、自分自身の記念として作成し、発表はしないとのこと。作詞は「蒲田人情歌」と、作曲は「とうふや源さん」と同じ先生に依頼しました。特に「源さんと女房」は、奥様に捧げる歌だとはうらやましいかぎりです。

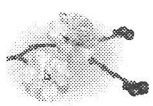
自分では、ご自身のことを「蒲田大好き人間」とおっしゃられ、「地域の活性化やボランティア活動に力を入れたい。」と、地域の話になると力が入ります。「地域の敬老会の新年会、忘年会の他、寝たきり高齢者の家にカセット持参でおじゃまして歌うことなどもやっていきたい。」と。「もちろん手弁当。出演は無料だよ。」と明るく語ります。「お祭りの時にお年寄りに舞台でカラオケで歌ってもらい、参加賞のみ差し上げるカラオケ大会なんかいかがでしょう。」とも。

最近は西蒲田にもマンションが増え、近所付き合いが希薄になってきています。同じ地域の住人同士の交流の立役者として、「町の名物とうふやさん・源さん」のますますの活躍を！と願う次第です。

(取材　飯嶋、下山委員)

「いよっ！」源さんの元気な声が今日も蒲田の町に

幻の原村梅林



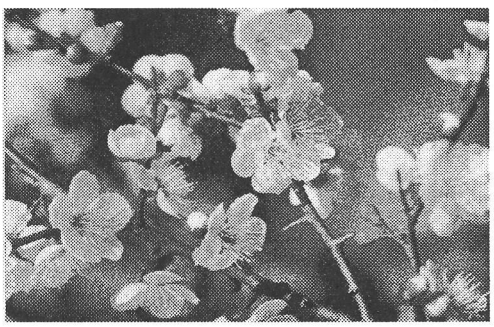
昭和五十一年、大田区のシンボルとして区の花は「梅」、区の木は「くすのき」として制定されました。

梅は古くから大田区の土地になじみ、歴史的な由緒も深く、花は清楚にして気品に満ち、早春の寒さに負けず咲くその姿は、若い世代の人が多い大田区には特にふさわしいものとして区の花に制定されました。

さて、今回は大田区にかつて現存した、あるいは現存する有名な梅園を特集してみました。明治、大正、昭和の初期にかけ、大梅林としてその名を知られていた幻の「原村梅林」。また、武蔵風土記に「安永天明のころより江戸より来り見る者多し」と記され、広重の名画によって広く知られる事となりましたが、現在はわずかに当時の面影を残している「梅屋敷」。さらに、大田区というより都内の梅の名所として有名な「池上梅園」。以上三ヶ所の梅園について記します。

原村梅林

明治十六年、原村(現在の多摩川二丁目)の名主、原清次郎が梅の実を採るために三百株の梅の木を植林、二千余坪の梅畑を造りました。もともとこの近郷は桃や梨の育成がさかんな土地で、多摩川の肥沃で保水性に富んだ地質を利用し、江戸に向けての野菜を栽培する傍ら、副業として果実の栽培も盛んでした。しかし、なかなか本業としての果実専業農家には踏み切れない現状がありました。



清楚な趣の白梅

後述の梅屋敷にも書かれているとおり、昔から蒲田近在では梅の実の生産が盛んであり、清次郎氏はこの点に着目し、梅の実の生産を事業として取り組む決意をした訳です。やがて梅の実の収穫も生産ペースに乗り始めた頃になり、この梅林が思わぬ方向へと進展し始めました。開花時期になると、近在の人々が花を見に集まるようになり、年々その数が増えてきました。清次郎氏は、梅林を三千坪に拡張し、梅の名木を増殖し、池や小高い丘を築造。頂には茶屋、売店まで建てたのです。この決断が見事に当たり、うわさがうわさを呼び、明治二十五年頃には近郷近在からの見物客が押し寄せ、すし屋の出張店では一日に三斗の米が必要だったそうです。

明治二十九年、日清戦争の直後、梅林は財閥伴田六之助の手に渡り、以後所有者は転々と代わりましたが、梅林はそのままに引き継がれ、相変わらずの観梅客で賑わいを見せていました。

しかし、大正から昭和に入り、次第に軍事色が濃くなり、急激な工業政策を推進しなければならなくなりました。そして、あれほど賑わった原村梅林も、昭和十二年春に、五十数年続いた歴史を閉じて、かねてより誘致していた工場用地のため、全て伐採されてしまったのです。

その後、跡地に建てられた工場も現在は縮小され、大半はマンションに変身し、往時を偲ぶことができるのは工場の片隅にひっそりと佇む記念の石碑のみとなりました。

(取材　滝口委員)

原村梅林跡に残る記念碑

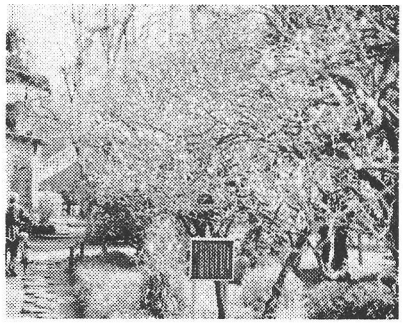
梅屋敷公園

蒲田は気候や土壌が適しているためか昔から梅の木が多く、農家の屋敷廻りにはたいてい二、三十株の梅を植えていました。花は白一色で、実は肉が厚く種が小さく、品質が良かったので、江戸時代に人々が愛用した梅干しや「梅びしほ」の原料の多くは蒲田の梅であったそうです。実を採ることが主な目的でしたが、春に先駆けて開花する頃は、なかなか見事な眺めで、風流人が梅を見に来るようになり、江戸中期には横浜の杉田、亀戸と並び称される梅の名所になっていました。

ここ蒲田は、江戸時代には東海道を往来する旅人にとって、絶好の休憩地でした。梅の里・蒲田にふさわしい名所、梅屋敷ができたのは文政の初期(1820年頃)で、この地に和中散という道中の常備薬を売っていた薬舗がありましたが、大森谷戸の薬商・山本忠三衛門が薬の株とともにこの家屋敷を買い受けました。そして倅の久三郎がこの庭園に梅の木数百株他、種々の花や木を植え付け、庭園を造営し、園内には酒肴も楽しめる茶屋を開業しました。これが梅屋敷と呼ばれ大盛況を見せ、広さも三千坪に及んだそうです。また徳川十二代将軍家慶が鷹狩に出かけた折や、十四代将軍家茂が文久三年(1863年)上洛の際に梅屋敷での休息の記録も残っています。

しかしこの地が史蹟として、特に明治維新の初期に国史上の重要な舞台になったことについては知る人は少ない筈です。ある意味で梅屋敷は、明治維新の機運を醸しだした源泉地であるとも言えます。幕末の時代、内外とも物情騒然たる時に際し、天下の志士たちはこの地に集まり、梅屋敷内の小亭で頻繁に会合を持ち、内には尊皇攘夷の議論が台頭し、外部にあっては黒船の来航があり、上下あげて不安にかられる情勢でした。これらの主な人々は、高杉晋作をはじめとする攘夷派の藩士たちであり、その後明治政府の大官となった三条実美、岩倉具視、沢三位、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文ら諸侯も加わりました。

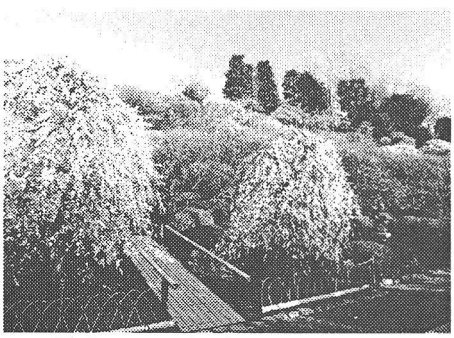
維新後は明治天皇、大正天皇など皇族方の行幸行啓の光栄に浴しました。しかし、大正七年にこの梅園も第一京浜国道の拡張工事により東側の大半がカットされ、さらに西側は京浜急行が走ることにより、現在は、わずかな昔の面影をかろうじて偲ぶ程度の梅屋敷公園が残っています。(取材　杉野、伊藤委員)


約二百年の歴史を持つ梅屋敷公園

池上梅園

池上梅園は、池上本門寺の西に位置し、丘陵斜面を利用した静かな庭園です。戦前まで北半分は、日本画家・伊東深水氏の自宅兼アトリエでした。しかし、戦災で焼失。戦後、築地の料亭経営者である小倉氏が南半分を拡張し、別邸として使用していました。氏の没後、ご遺族の意志により、庭園として残すことを条件に東京都に譲渡されました。その後、昭和五十三年には大田区に移管され、紅梅を中心に植林と庭園の拡張を進め、現在では白梅百五十本、紅梅二百二十本の計三百七十本を数えるまでになりました。茶室、庭石、灯篭等の調和にもきめ細かい配慮が見られます。一月上旬の蝋梅から、三月中旬の八重揚羽まで二ヶ月にわたり三十種あまりの梅を楽しむことができます。また、梅の他には牡丹やつつじなどの樹木があり、四季を通じて花が楽しめます。

梅は中国渡来の植物でその実は梅干し、梅酒という保存食になるばかりでなく、最も早く咲くことから古来より花の兄として愛されてきました。梅の種類はその性質から野梅系、豊後系、紅梅系の三系統に分類され、それぞれについて一重、八重、紅白、絞りなどの品種があります。梅の名称は、愛好家が名付けたもので、現在三百種余有るといわれていますが、池上梅園では、三十種類を見ることができます。(取材　高橋、市石委員)


入園時間外の池上梅園はひそやかに美しく

今昔　ふる里女塚

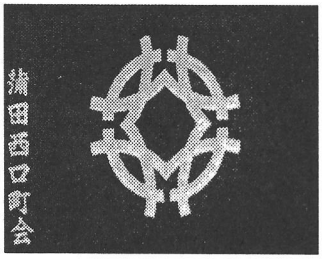
蒲田西口町会長　若林　登

生まれも、育ちも蒲田っ子。七十代に入って、昔のことが走馬灯のように胸を打つ。隣家の染物屋の広い干し場のはずれにひと雨降ると、近所のドブ川の水門でフナはもちろん、コイやナマズも捕れた。ナマズを捕った時は興奮して一睡もせず、朝までバケツの中を見ていて叱られた。

私たちの旧町会名(女塚四丁目町会)の「女塚」の由来は、もとオンナナナツカ(女七塚)で、新田義貞の弟義興が、かの歌舞伎で有名な「お舟頓兵衛矢口の渡し」にあるように、暗殺された際、あとを慕って死んだ七人の侍女を村人が葬った塚がこの地に分散して七基ある。故に女七塚と称したということであった。現在も女塚神社の境内の一隅にお塚さんがあり、以前より村人の崇敬の厚い聖地であり、女塚霊神が祀られている。

蒲田をふる里と呼ぶとき、その頃の蒲田はいわゆる新開地。京浜工業地帯の発展に伴い、外からどんどん人が入ってきた時代でした。戦後の急速な発展を見続けた私たちは静かで、平和な暮らしを願いつづけてきた。そして昭和二十九年に女塚四丁目町会が誕生。初代会長は森鉄太郎氏でした。さらに昭和四十二年の住居表示の実施に伴い、現在の蒲田西口町会と改名。今年で満五十年を迎えるにあたり、「創立五十年の歩み」の記録や資料の整理作業をスタートいたします。

私たちの町会は、ＪＲ蒲田駅西口の玄関口として、繁華街、高層ビルの建ち並ぶ地域です。二十一世紀に入り、大田区中心市街地活性化基本計画の蒲田駅西口周辺地域に指定されました。その重要性を心に刻み、災害に強い町、明るいきれいな町を目指し、多くの人が蒲田の町につどって下さるよう、役員一同頑張ります。



紺の蒲田西口町会旗

事務局からのお知らせ

蒲田西特別出張所の入口斜め右に「地域情報コーナー」を設けましたが、お気付きでしょうか。平成十三年秋、出張所管内の小・中学校、児童館、保育園等が互いに情報を共有し、これらの施設の情報を地域の皆様にもお知らせしようと「地域情報コーナー」を設けました。

このコーナーには、タイムリーに各小・中学校の学校だより、児童館のイベント、保育園の行事等を逐次掲出します。出張所におでかけの際は、是非一度のぞいてみてください。興味がある催しに参加してみてはいかがでしょう。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，609人
	女	27，293人
	計	56，902人
世帯		28，836世帯

平成15年2月1日現在

編集後記

わがまちの顔「とうふや源さん」こと藤浪源八郎さんは、西蒲田で豆腐屋を営む兼業歌手です。その活躍ぶりは、地元の人々はもちろん、各地のファンの間でも有名なことです。奥様への思いやりや地域のボランティア支援のお話を伺い、その人柄に触れることができました。今後のご活躍を期待しております。

特集の「幻の原村梅林」は今から六十五年前、五十数年の歴史を閉じて、当時の世相のため全て伐採され、惜しまれつつ悲劇的な結末を迎えたのでした。時代の流れに翻弄され、数奇な運命をたどったことは、大変残念です。

しかし、後に工場の敷地として、日本の戦前戦後の経済成長の一端を担い、今日まで立派に役割を果たしたことがせめてもの救いと思われます。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
三七三二―四七八五